Catalyst 3850シリーズスイッチでのCPU高使用 率のトラブルシューティング

内容
<u>はじめに</u>
<u>背景説明</u>
<u>ケーススタディ:アドレス解決プロトコル(ARP)割り込み</u>
<u>ステップ1:CPUサイクルを消費しているプロセスを特定する</u>
<u>手順2:高CPU使用率の原因となっているCPUキューを特定する</u>
<u>ステップ3:CPUに送信されるパケットのダンプ</u>
<u>ステップ4:FEDトレースの使用</u>
<u>Cisco Catalyst 3850 シリーズ スイッチ用のサンプル、組み込みイベント マネージャ(EEM)ス</u> <u>クリプト</u>
<u>Cisco IOS XE 16.x以降のリリース</u>
関連情報

はじめに

このドキュメントでは、新しいCisco IOS[®] XEプラットフォームで、主に割り込みによって発生 するCPU使用率の問題をトラブルシューティングする方法について説明します。

背景説明

Cisco IOS® XEの構築方法を理解することが重要です。Cisco IOS® XEを使用して、シスコは Linuxカーネルに移行し、すべてのサブシステムがプロセスに分割されました。モジュールドライ バやハイアベイラビリティ(HA)など、以前はCisco IOS内に存在していたすべてのサブシステムは 、現在はLinuxオペレーティングシステム(OS)内のソフトウェアプロセスとして動作します。 Cisco IOS自体は、Linux OS(IOSd)内のデーモンとして動作します。Cisco IOS® XEは、従来の Cisco IOS®と同じルックアンドフィールだけでなく、その動作、サポート、および管理も保持し ています。

さらに、このドキュメントでは、CPU使用率の問題のトラブルシューティングに不可欠な、この プラットフォーム上の新しいコマンドをいくつか紹介します。

いくつかの有用な定義を次に示します。

- Forwarding Engine Driver(FED): これはCisco Catalyst 3850シリーズスイッチの中核であり、すべてのハードウェアプログラミング/転送を担当します。
- Cisco IOSd:Linuxカーネルで動作するCisco IOS®デーモンです。カーネル内のソフトウェア プロセスとして実行されます。

- Packet Delivery System (PDS;パケット配信システム):さまざまなサブシステムとの間でパケットを配信する方法のアーキテクチャとプロセスです。たとえば、FED と IOSd の間でのパケットの送受信を制御します。
- ハンドル:ハンドルはポインタと考えることができます。これは、ボックスが生成する出力 で使用される特定の変数に関する詳細情報を見つけるために使用されます。Cisco Catalyst 6500 シリーズ スイッチのローカル ターゲット ロジック(LTL)インデックスの概念に似て います。

ケーススタディ:アドレス解決プロトコル(ARP)割り込み

このセクションで説明するトラブルシューティングおよび検証プロセスは、割り込みによって高い CPU 使用率が生じている状況で幅広く使用できます。

ステップ1:CPUサイクルを消費しているプロセスを特定する

show process cpu コマンドは、CPU の現在の状態をそのまま表示します。Cisco Catalyst 3850シ リーズスイッチは4つのコアを使用し、4つのコアすべてのCPU使用率が表示されます。

<#root>

3850-2#

show processes cpu sorted | exclude 0.0

Core 0: CPU utilization for five seconds: 53%; one minute: 39%; five minutes: 41% Core 1: CPU utilization for five seconds: 43%; one minute: 57%; five minutes: 54% Core 2: CPU utilization for five seconds: 95%; one minute: 60%; five minutes: 58% Core 3: CPU utilization for five seconds: 32%; one minute: 31%; five minutes: 29% Runtime(ms) Invoked uSecs 5Sec PID 1Min 5Min TTY Process 472560 2345554 7525 31.37 30.84 30.83 iosd 8525 0 9234031 698 12.56 2157452 13.17 12.54 1088 fed 5661 6206 19630 74895 262 1.83 0.43 0.10 0 eicored 6197 725760 11967089 60 1.41 1.38 1.47 0 pdsd

出力から、Cisco IOS®デーモンが、このボックスの中心であるFEDとともにCPUの大部分を消費 していることがわかります。割り込みによってCPU使用率が高くなっている場合は、Cisco IOSdとFEDがCPUの大部分を使用しており、次のサブプロセス(またはこれらのサブセット)が CPUを使用していることがわかります。

- FED Punject TX
- FED Punject RX
- · FED Punject replenish
- FED Punject TX complete

show process cpu detailed <process> コマンドを使用すると、これらのプロセスを詳しく調べる ことができます。CPU使用率の大部分はCisco IOSdが担当しているため、次に詳細を示します。

<#root>

3850-2#

show processes cpu detailed process iosd sorted | ex 0.0

Core 0: CPU utilization for five seconds: 36%; one minute: 39%; five minutes: 40% Core 1: CPU utilization for five seconds: 73%; one minute: 52%; five minutes: 53% Core 2: CPU utilization for five seconds: 22%; one minute: 56%; five minutes: 58% Core 3: CPU utilization for five seconds: 46%; one minute: 40%; five minutes: 31% PID T C TID Runtime(ms)Invoked uSecs 5Sec 1Min 5Min TTY Process (%) (%) (%) 2356540 7526 30.42 30.77 30.83 0 8525 L 556160 iosd L 1 8525 712558 284117 0 23.14 23.33 23.38 0 iosd 8525 59 1115452 4168181 0 42.22 39.55 39.33 0 **ARP** Snoop Т 198 Ι 3442960 4168186 0 25.33 24.22 24.77 0 IP Host Track Proce 27.88 27.66 0 3802130 30 Ι 4168183 0 24.66 ARP Input 283 Ι 574800 3225649 0 4.33 4.00 4.11 0 DAI Packet Process

3850-2#

show processes cpu detailed process fed sorted | ex 0.0

Core 0: CPU utilization for five seconds: 45%; one minute: 44%; five minutes: 44% Core 1: CPU utilization for five seconds: 38%; one minute: 44%; five minutes: 45% Core 2: CPU utilization for five seconds: 42%; one minute: 41%; five minutes: 40% Core 3: CPU utilization for five seconds: 32%; one minute: 30%; five minutes: 31% TTY Process PID T C TID Runtime(ms)Invoked uSecs 5Sec 1Min 5Min (%) (%) (%) 5638 L 612840 1143306 536 13.22 12.90 12.93 1088 fed L 3 8998 5638 396500 602433 0 9.87 9.63 9.61 0 PunjectTx 5638 L 3 8997 159890 66051 0 2.70 2.70 2.74 PunjectRx 0

出力(Cisco IOSd CPU出力)は、ARPスヌープ、IPホストトラックプロセス、およびARP入力が 高いことを示しています。これは、ARP パケットによる CPU 割り込みが発生しているときによ く見られる現象です。

手順2:高CPU使用率の原因となっているCPUキューを特定する

Cisco Catalyst 3850 シリーズ スイッチには、さまざまなタイプのパケットに対応するための多数 のキューがあります(FED は 32 個の RX CPU キューを保持しています。これらは CPU に直接 送信されるキューです)。どのパケットがCPUにパントされ、どのパケットがCisco IOSdで処理 されるかを検出するには、これらのキューを監視することが重要です。これらのキューは ASIC ごとにあります。

注:ASICには0と1の2つがあります。ポート1 ~ 24はASIC 0に属しています。

キューを表示するには、 show platform punt statistics port-asic <port-asic>cpuq <queue> direction

コマンドを使用して、アップグレードを実行します。

show platform punt statistics port-asic 0 cpuq -1 direction rx コマンドで -1 引数を指定すると、す べてのキューが表示されます。したがって、このコマンドを実行すると、Port-ASIC 0 のすべて の受信キューが表示されます。

次に、多数のパケットを高速でプッシュしているキューを特定する必要があります。この例では 、キューを詳しく調べることで次のキューが原因になっていることがわかります。

<snip> RX (ASIC2CPU) Stats (asic 0 qn 16 lqn 16): RXQ 16: CPU_Q_PROTO_SNOOPING -----Packets received from ASIC : 79099152 Send to IOSd total attempts : 79099152 Send to IOSd failed count : 1240331 RX suspend count : 1240331 : 1240330 RX unsuspend count RX unsuspend send count : 1240330 RX unsuspend send failed count : 0 RX dropped count : 0 RX conversion failure dropped : 0 RX pkt_hdr allocation failure : 0 RX INTACK count : 0 RX packets dq'd after intack : 0 Active RxQ event : 9906280 RX spurious interrupt : 0 <snip>

キュー番号は 16 で、キュー名は CPU_Q_PROTO_SNOOPING です。

問題を引き起こしているキューを見つけるもう 1 つの方法は、show platform punt client コマンド を入力することです。

<#root>

3850-2#

show platform punt client

tag	buffer	jumbo	fallback	pa	ackets received		failures		
				alloc	free	bytes	conv	buf	
27	0/1024/2048	0/5	0/5	0	0	0	0	0	
65536	0/1024/1600	0/0	0/512	0	0	0	0	0	
65537	0/ 512/1600	0/0	0/512	1530	1530	244061	0	0	
65538	0/ 5/5	0/0	0/5	0	0	0	0	0	
65539	0/2048/1600	0/16	0/512	0	0	0	0	0	
65540	0/ 128/1600	0/8	0/0	0	0	0	0	0	
65541	0/ 128/1600	0/16	0/32	0	0	0	0	0	
65542	0/ 768/1600	0/4	0/0	0	0	0	0	0	
65544	0/ 96/1600	0/4	0/0	0	0	0	0	0	
65545	0/ 96/1600	0/8	0/32	0	0	0	0	0	
65546	0/ 512/1600	0/32	0/512	0	0	0	0	0	
65547	0/ 96/1600	0/8	0/32	0	0	0	0	0	
65548	0/ 512/1600	0/32	0/256	0	0	0	0	0	

65551	0/	512/1600	0/0	0/256	0	0	0	0	0	
65556	0/	16/1600	0/4	0/0	0	0	0	0	0	
65557	0/	16/1600	0/4	0/0	0	0	0	0	0	
65558	0/	16/1600	0/4	0/0	0	0	0	0	0	
65559	0/	16/1600	0/4	0/0	0	0	0	0	0	
65560	0/	16/1600	0/4	0/0	0	0	0	0	0	
s65561	421/	512/1600	0/0	0/128	79565859	131644697	47898	34244	0 37	467
65563	0/	512/1600	0/16	0/256	0	0	0	0	0	
65564	0/	512/1600	0/16	0/256	0	0	0	0	0	
65565	0/	512/1600	0/16	0/256	0	0	0	0	0	
65566	0/	512/1600	0/16	0/256	0	0	0	0	0	
65581	0/	1/1	0/0	0/0	0	0	0	0	0	
131071	0/	96/1600	0/4	0/0	0	0	0	0	0	
fallback	< poo ⁻	1: 98/1500/	/1600							
jumbo po	: Foc	0/128/93	300							

ほとんどのパケットが割り当てられているタグを特定します。この例では、65561 です。

続いて、次のコマンドを入力します。

<#root>

3850-2#

show pds tag all | in Active | Tags | 65561

Active	Client Client					
Tags	Handle Name	TDA	SDA	FDA	TBufD	TBytD
65561	7296672 Punt Rx Proto Snoop	79821397	79821397	0 79	821397	494316524

この出力は、キューがRx Proto Snoopであることを示しています。

show platform punt client コマンドの出力の 65561 の前の s は、FED ハンドルが多数の着信パケットを処理しきれず、中断状態になっていることを示しています。s が消えない場合は、キューが完全にスタックしていることを意味します。

ステップ3:CPUに送信されるパケットのダンプ

show pds tag all コマンドの結果では、ハンドル 7296672 が Punt Rx Proto Snoop の横に表示されています。

このハンドルを show pds client <handle> packet last sink コマンドで使用します。このコマンド を使用する前に、debug pds pktbuf-last を有効にする必要があります。これを行わないと、次の エラーが発生します。

<#root>

3850-2#

show pds client 7296672 packet last sink

% switch-2:pdsd:This command works in debug mode only. Enable debug using "debug pds pktbuf-last" command

デバッグを有効にすると、次の出力が表示されます。

<#root>

3850-2#

show pds client 7296672 packet last sink

Dumping Packet(54528) # 0 of Length 60

Meta-	-dat	ta															
0000	00	00	00	00	00	00	00	00	00	00	00	00	00	00	00	00	
0010	00	00	16	1d	00	00	00	00	00	00	00	00	55	5a	57	f0	UZW.
0020	00	00	00	00	fd	01	10	df	00	5b	70	00	00	10	43	00	C.
0030	00	10	43	00	00	41	fd	00	00	41	fd	00	00	00	00	00	CAA
0040	00	00	00	00	00	00	00	00	00	00	00	00	00	00	00	00	
0050	00	00	00	3c	00	00	00	00	00	01	00	19	00	00	00	00	<
0060	01	01	b6	80	00	00	00	4f	00	00	00	00	00	00	00	00	0
0070	01	04	d8	80	00	00	00	33	00	00	00	00	00	00	00	00	
0080	00	00	00	00	00	00	00	00	00	00	00	00	00	00	00	00	
0090	00	01	00	00	00	00	00	00	00	00	00	00	00	00	00	00	
00a0	00	00	00	00	00	00	00	02	00	00	00	00	00	00	00	00	
Data																	
0000	ff	ff	ff	ff	ff	ff	aa	bb	сс	dd	00	00	08	06	00	01	
0010	08	00	06	04	00	01	aa	bb	сс	dd	00	00	с0	a8	01	0a	
0020	ff	ff	ff	ff	ff	ff	с0	a8	01	14	00	01	02	03	04	05	
0030	06	07	08	09	0a	0b	0c	0d	0e	0f	10	11					

このコマンドは、シンク(この例ではCisco IOSd)が最後に受信したパケットをダンプします。 これはヘッダーがダンプされ、端末ベースの Wireshark(TShark)でデコードできることを示し ています。Meta-data はシステムが内部で使用するものですが、Data 出力は実際のパケット情報 を提供します。ただし、Meta-data は非常に役立ちます。

0070で始まる行に注目してください。その後の最初の16ビットを次のように使用します。

<#root>

3850-2#

show platform port-asic ifm iif-id 0x0104d88000000033

Interface	Table		
Interface	IIF-ID	:	0x0104d8800000033
Interface	Name	:	Gi2/0/20
Interface	Block Pointer	:	0x514d2f70
Interface	State	:	READY
Interface	Stauts	:	IFM-ADD-RCVD, FFM-ADD-RCVD
Interface	Ref-Cnt	:	6

Interface Epoch : 0 Interface Type : ETHER Port Type : SWITCH PORT : LOCAL Port Location Slot : 2 : 20 Unit Slot Unit : 20 Acitve : Y : 22 SNMP IF Index GPN : 84 EC Channel : 0 EC Index : 0 ASIC : 0 ASIC Port : 14 Port LE Handle : 0x514cd990 Non Zero Feature Ref Counts FID : 48(AL_FID_L2_PM), Ref Count : 1 FID : 77(AL_FID_STATS), Ref Count : 1 FID : 51(AL_FID_L2_MATM), Ref Count : 1 FID : 13(AL_FID_SC), Ref Count : 1 FID : 26(AL_FID_QOS), Ref Count : 1 Sub block information FID : 48(AL_FID_L2_PM), Private Data : 0x54072618 FID : 26(AL_FID_QOS), Private Data : 0x514d31b8

ここで問題を引き起こしているインターフェイスが判明します。ARP トラフィックを送り出して いるトラフィック ジェネレータがあるのは Gig2/0/20 です。このインターフェイスをシャットダ ウンすると、問題が解決され、CPU 使用率が最小限に抑えられます。

ステップ4:FEDトレースの使用

前のセクションで説明した方法の唯一の欠点は、シンクに入る最後のパケットをダンプするだけ であり、問題の原因になれないことです。

より適切なトラブルシューティング方法は、FED トレースと呼ばれる機能を使用することです。 トレースとは、FED から CPU にプッシュされるパケットを(各種フィルタを使用して)キャプ チャする方法です。ただし、FED トレースは Cisco Catalyst 6500 シリーズ スイッチの Netdr 機 能ほどシンプルではありません。

ここでは、このプロセスをいくつかのステップに分割して説明します。

詳細トラッキングを有効にする。デフォルトでは、イベント トレースはオンになっています。実際のパケットをキャプチャするには、詳細トレースを有効にする必要があります。

<#root>

3850-2#

set trace control fed-punject-detail enable

 キャプチャ バッファを微調整する。詳細トレースに使用するバッファのサイズを決定し、 必要に応じてサイズを増やします。

<#root>

3850-2#

show mgmt-infra trace settings fed-punject-detail

One shot Trace Settings:

Buffer Name: fed-punject-detail Default Size: 32768 Current Size: 32768 Traces Dropped due to internal error: No Total Entries Written: 0 One shot mode: No One shot and full: No Disabled: False

バッファ サイズを変更するには、次のコマンドを使用します。

<#root>

3850-2#

set trace control fed-punject-detail buffer-size

使用できる値は次のとおりです。

<#root>

3850-2#

set trace control fed-punject-detail buffer-size ?

<8192-67108864> The new desired buffer size, in bytes default Reset trace buffer size to default キャプチャ フィルタを追加する。次に、キャプチャに使用する各種フィルタを追加する必要があります。複数の異なるフィルタを追加し、それらのフィルタのすべてに一致、またはいずれかに一致するパケットをキャプチャできます。

フィルタを追加するには、次のコマンドを使用します。

<#root>

3850-2#

set trace fed-punject-detail direction rx filter_add

現在使用できるオプションは次のとおりです。

<#root>

3850-2#

set trace fed-punject-detail direction rx filter_add ?

cpu-queue	rxq 031
field	field
offset	offset

次に、各要素を結び付ける必要があります。このトラブルシューティング プロセスのステ ップ 2 で明らかになった、問題の原因になっているキューを思い出してください。キュー 16 は、CPU に多数のパケットをプッシュしているキューです。そのため、このキューをト レースし、このキューから CPU に送られているパケットを調べることには意味があります 。

キューをトレースするには、次のコマンドを使用します。

<#root>

3850-2#

set trace fed-punject-detail direction rx filter_add cpu-queue

この例では、次のコマンドを使用します。

<#root>

3850-2#

set trace fed-punject-detail direction rx filter_add cpu-queue 16 16

フィルターのすべてに一致させるか、いずれかに一致させるかを選択し、トレースを有効に する必要があります。

<#root>

3850-2#

set trace fed-punject-detail direction rx match_all

3850-2#

set trace fed-punject-detail direction rx filter_enable

4. フィルタしたパケットを表示する。キャプチャしたパケットは、show mgmt-infra trace messages fed-punject-detail コマンドで表示できます。

<#root>

3850-2#

show mgmt-infra trace messages fed-punject-detail

[11/25/13 07:05:53.814 UTC 2eb0c9 5661] 00 00 00 00 00 4e 00 40 07 00 02 08 00 00 51 3b 00 00 00 00 00 01 00 00 03 00 00 00 00 00 01 00 00 00 00 20 00 00 0e 00 00 00 00 00 01 00 74 00 00 00 04 00 54 41 02 00 00 00 00 00 00 00 00

[11/25/13 07:05:53.814 UTC 2eb0ca 5661] ff ff ff ff ff ff aa bb cc dd 00 00 08 06 00 01 08 00 06 04 00 01 aa bb cc dd 00 00 c0 a8 01 0a ff ff ff ff ff ff c0 a8 01 14 00 01 02 03 04 05 06 07 08 09 0a 0b 0c 0d 0e 0f 10 11 f6 b9 10 32 [11/25/13 07:05:53.814 UTC 2eb0cb 5661] Frame descriptors: [11/25/13 07:05:53.814 UTC 2eb0cc 5661] _____ fdFormat=0x4 systemTtl=0xe loadBalHash1=0x8 loadBalHash2=0x8 forwardingMode=0x0 spanSessionMap=0x0 destModIndex=0x0 skipIdIndex=0x4 srcGpn=0x54 qosLabel=0x41 srcCos=0x0 ingressTranslatedVlan=0x3 bpdu=0x0 spanHistory=0x0 sgt=0x0 fpeFirstHeaderType=0x0 srcVlan=0x1 rcpServiceId=0x2 wccpSkip=0x0 srcPortLeIndex=0xe cryptoProtocol=0x0 debugTagId=0x0 vrfId=0x0 saIndex=0x0 pendingAfdLabe1=0x0 destClient=0x1 appId=0x0 finalStationIndex=0x74 decryptSuccess=0x0 encryptSuccess=0x0 rcpMiscResults=0x0 stackedFdPresent=0x0 spanDirection=0x0 egressRedirect=0x0 redirectIndex=0x0 exceptionLabel=0x0 destGpn=0x0 inlineFd=0x0 suppressRefPtrUpdate=0x0 suppressRewriteSideEfects=0x0 cmi2=0x0currentRi=0x1 currentDi=0x513b dropIpUnreachable=0x0 srcZoneId=0x0 srcAsicId=0x0 originalDi=0x0 originalRi=0x0 srcL3IfIndex=0x2 dstL3IfIndex=0x0 dstVlan=0x0 frameLength=0x40 fdCrc=0x7 tunnelSpokeId=0x0 _____ [11/25/13 07:05:53.814 UTC 2eb0cd 5661] [11/25/13 07:05:53.814 UTC 2eb0ce 5661] PUNT PATH (fed_punject_rx_process_packet: 830):RX: Q: 16, Tag: 65561 [11/25/13 07:05:53.814 UTC 2eb0cf 5661] PUNT PATH (fed_punject_get_physical_iif: 579):RX: Physical IIF-id 0x104d88000000033 [11/25/13 07:05:53.814 UTC 2eb0d0 5661] PUNT PATH (fed_punject_get_src_l3if_index: 434):RX: L3 IIF-id 0x101b680000004f [11/25/13 07:05:53.814 UTC 2eb0d1 5661] PUNT PATH (fed_punject_fd_2_pds_md:478): RX: $12_logical_if = 0x0$ [11/25/13 07:05:53.814 UTC 2eb0d2 5661] PUNT PATH (fed_punject_get_source_cos:638): RX: Source Cos 0 [11/25/13 07:05:53.814 UTC 2eb0d3 5661] PUNT PATH (fed_punject_get_vrf_id:653): RX: VRF-id 0 [11/25/13 07:05:53.814 UTC 2eb0d4 5661] PUNT PATH (fed_punject_get_src_zoneid:667): RX: Zone-id 0 [11/25/13 07:05:53.814 UTC 2eb0d5 5661] PUNT PATH (fed_punject_fd_2_pds_md:518): RX: get_src_zoneid failed [11/25/13 07:05:53.814 UTC 2eb0d6 5661] PUNT PATH (fed_punject_get_acl_log_direction: 695): RX: : Invalid CMI2 [11/25/13 07:05:53.814 UTC 2eb0d7 5661] PUNT PATH (fed_punject_fd_2_pds_md:541):RX: get_acl_log_direction failed [11/25/13 07:05:53.814 UTC 2eb0d8 5661] PUNT PATH (fed_punject_get_acl_full_direction: 724):RX: DI 0x513b ACL Full Direction 1 [11/25/13 07:05:53.814 UTC 2eb0d9 5661] PUNT PATH (fed_punject_get_source_sgt:446):

RX: Source SGT 0
[11/25/13 07:05:53.814 UTC 2eb0da 5661] PUNT PATH (fed_punject_get_first_header_type:680):
RX: FirstHeaderType 0
[11/25/13 07:05:53.814 UTC 2eb0db 5661] PUNT PATH (fed_punject_rx_process_packet:916):
RX: fed_punject_pds_send packet 0x1f00 to IOSd with tag 65561
[11/25/13 07:05:53.814 UTC 2eb0dc 5661] PUNT PATH (fed_punject_rx_process_packet:744):
RX: **** RX packet 0x2360 on qn 16, len 128 ****
[11/25/13 07:05:53.814 UTC 2eb0dd 5661]
buf_no 0 buf_len 128

<snip>

この出力は多くの情報を提供し、通常はパケットの送信元と内容を検出するのに十分です。

ヘッダー ダンプの最初の部分は、先ほどと同様にシステムで使用される Meta-data です。2 番目の部分は実際のパケットです。

ff ff ff ff ff ff - destination MAC address aa bb cc dd 00 00 - source MAC address

この送信元MACアドレスをトレースして、原因となるポートを検出できます(これがキュ ー16からパントされるパケットの大部分であることが特定されたら、この出力にはパケッ トのインスタンスが1つだけが示され、他の出力やパケットはクリップされます)。

ただし、さらに良い方法があります。ヘッダー情報の後にあるログに注意してください。

[11/25/13 07:05:53.814 UTC 2eb0ce 5661] PUNT PATH (fed_punject_rx_process_packet: 830):RX: Q: 16, Tag: 65561 [11/25/13 07:05:53.814 UTC 2eb0cf 5661] PUNT PATH (fed_punject_get_physical_iif: 579):RX: Physical IIF-id 0x104d88000000033

最初のログは、このパケットの送信元のキューとタグをはっきり示しています。以前にキュ ーに気付かなかった場合は、この方法でキューを簡単に識別できます。

2番目のログは、送信元インターフェイスの物理インターフェイスIDファクトリ(IIF)-IDを提 供するため、さらに便利です。16 進数値は、そのポートに関する情報をダンプするために 使用できるハンドルです。

<#root>

3850-2#

show platform port-asic ifm iif-id 0x0104d88000000033

Interface Table	
Interface IIF-ID	: 0x0104d8800000033
Interface Name	: Gi2/0/20
Interface Block Pointer	: 0x514d2f70
Interface State	: READY
Interface Stauts	: IFM-ADD-RCVD, FFM-ADD-RCVD
Interface Ref-Cnt	: 6
Interface Epoch	: 0
Interface Type	: ETHER
Port Type	: SWITCH PORT
Port Location	: LOCAL
Slot	: 2
Unit	: 20
Slot Unit	: 20
Active	: Y
SNMP IF Index	: 22
GPN	: 84
EC Channel	: 0
EC Index	: 0
ASIC	: 0
ASIC Port	: 14
Port LE Handle	: 0x514cd990
Non Zero Feature Ref Cou	nts
FID : 48(AL_FID_	L2_PM), Ref Count : 1
FID : 77(AL_FID_	STATS), Ref Count : 1
FID : 51(AL_FID_	L2_MATM), Ref Count : 1
FID : 13(AL_FID_	SC), Ref Count : 1
FID : 26(AL_FID_	<u>Q</u> OS), Ref Count : 1
Sub block information	
FID : 48(AL_FID_	L2_PM), Private Data : 0x54072618
FID : 26(AL_FID_	<u>Q</u> OS), Private Data : 0x514d31b8

送信元インターフェイスを再度特定し、問題を引き起こしています。

トレースは、高いCPU使用率の問題のトラブルシューティングに不可欠な強力なツールであり、 このような状況を正常に解決するために多くの情報を提供します。

Cisco Catalyst 3850 シリーズ スイッチ用のサンプル、組み込みイベント マネージャ(EEM)スクリプト

特定のしきい値でログの生成をトリガーするには、次のコマンドを使用します。

process cpu threshold type total rising

interval

このコマンドを実行すると、次のようなログが生成されます。

*Jan 13 00:03:00.271: %CPUMEM-5-RISING_THRESHOLD: 1 CPUMEMd[6300]: Threshold: : 50, Total CPU Utilzati

生成されたログには次の情報が含まれています。

- トリガー時の合計 CPU 使用率。これは、この例ではTotal CPU Utilization(total/Intr) :50/0に よって識別されます。
- 上位プロセス これらは PID/CPU% 形式で表示されます。この例では、上位プロセスは次のとおりです。

8622/25 - 8622 is PID for IOSd and 25 implies that this process is using 25% CPU. 5753/12 - 5733 is PID for FED and 12 implies that this process is using 12% CPU.

EEM スクリプトを次に示します。

event manager applet highcpu event syslog pattern "%CPUMEM-5-RISING_THRESHOLD" action 0.1 syslog msg "high CPU detected" action 0.2 cli command "enable" action 0.3 cli command "show process cpu sorted | append nvram:<filename>.txt" action 0.4 cli command "show process cpu detailed process <process name|process ID> sorted | nvram:<filename>.txt" action 0.5 cli command "show platform punt statistics port-asic 0 cpuq -1 direction rx | append nvram:<filename>.txt" action 0.6 cli command "show platform punt statistics port-asic 1 cpuq -1 direction rx | append nvram:<filename>.txt" action 0.7 cli command "conf t" action 0.8 cli command "no event manager applet highcpu"

◆ 注:現在、process cpu threshold コマンドは3.2.Xトレインでは機能しません。もう1つ覚え ておくべき点は、このコマンドは4つのコアの平均CPU使用率を調べ、この平均がコマンド で定義されているパーセンテージに達するとログを生成するということです。

Cisco IOS XE 16.x以降のリリース

Cisco IOS® XEソフトウェアリリース16.x以降が稼働するCatalyst 3850スイッチを使用している 場合は、「<u>IOS-XE 16.xが稼働するCatalystスイッチプラットフォームでのCPU使用率が高い場合</u> <u>のトラブルシューティング</u>」を参照してください。

関連情報

- ・ <u>Cisco IOS XE とは</u>
- <u>Cisco Catalyst 3850 スイッチ データ シートおよび製品資料</u>
- シスコのテクニカルサポートとダウンロード

翻訳について

シスコは世界中のユーザにそれぞれの言語でサポート コンテンツを提供するために、機械と人に よる翻訳を組み合わせて、本ドキュメントを翻訳しています。ただし、最高度の機械翻訳であっ ても、専門家による翻訳のような正確性は確保されません。シスコは、これら翻訳の正確性につ いて法的責任を負いません。原典である英語版(リンクからアクセス可能)もあわせて参照する ことを推奨します。